

お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」の第30弾をお届けします。

(シリーズ担当：R. I.)

第30話 昔と今の米作り（その3. 田植え）



③ 田植え

暖かくなった4月から5月の初め、苗代で育てた苗を水田に植えます。となり近所の人たちも手伝って、みんなで田んぼに苗を植えます。田植えは、腰を曲げたまま作業を続けるので、とても辛い仕事です。

図30-1 江戸時代（元禄）の田植え風景



図30-2 昭和30～40年代の田植え用型付け

田植定規という道具を転がして、田んぼに苗を植える印をつけます(昭和41年 山形県酒田市) これは、寒地、寒冷地の田植え方式です。通常、交点に植え付けます。



図30-3 植縄を使つての田植え

暖地、温暖地では、植縄に付けた印を見ながら移植します。

(出典：福島県三島町観光協会公式サイト <http://www.mishima-kankou.net/20190522/> から引用)



田植機を使って、田植えをします。
 (平成2年 岡山県岡山市)
 この田植機の出現によって、それまで大変な労働を要していた移植作業が軽減され、驚くほど楽になりました。

図 30-4 現代の乗用田植機による移植

(出典：図 30-1～2、4 農水省 HP 子供のための農業教室

http://www.maff.go.jp/j/agri_school/a_kome/index.html から引用)



図 30-5 無人作業中の自動運転田植機 (ほ場端で自動旋回している様子) 農研機構

(出典：プレスリリース(研究成果) 自動運転田植機を開発 情報公開日:2017年6月16日から引用)

この写真をご覧ください。この田植機は、運転操作する人の乗っていない、無人田植機です。これは、市販の乗用田植機(8条)をベースとし、機体前方にRTK-GNSSのアンテナと受信機を備え、自機の位置を数cmの測位精度で把握します。また、三軸ジャイロセンサを併設することで、自機の向き、傾きを計測して、より高精度な位置情報に補正します。一方、衛星測位情報などから求めた自機の位置を基に、ハンドルと操舵機構の中継部に組み込んだ操舵モータをECU*で制御し、予め作成した経路に沿って走行するように自動で操舵します。特に旋回時は、独自開発の自動操舵システムにより、次の直進行程の開始位置に円滑かつ迅速に合わせることができます。(*ECU: Engine control unit. 主に自動車に搭載される電子制御ユニットのこと)

(公社)国際農林業協働協会(JAICAF)

〒107-0052 東京都港区赤坂8丁目10-39 赤坂KSAビル3階

お米のはなし No.30 2020年1月10日